

## イラン国王の欧州紀行

守川 知子 (北海道大学)

### はじめに

19世紀のイラン(ガージャール朝:1796-1925年)という国  
= 「帝国」でもなく、「植民地」でもない

\* 当時の「地域大国」が、「帝国」をどのように見ていたか?

#### 国境線の画定

- 1796年 ガージャール朝イランの成立
- 1813年 ゴレスタン条約: グルジア、アゼルバイジャンをロシアへ割譲
- 1823年 第1次エルズルム条約: オスマン=ガージャール間の和平条約
- 1828年 トルコマンチャーイ条約: アラス川がロシアとの国境に
- 1838~42年 第1次アフガン戦争
- 1847年 第2次エルズルム条約: トルコからイラクにかけての国境基本ラインが画定
- 1856年 ヘラート包囲
- 1857年 パリ条約: アフガニスタンの主権を喪失

### 1. ナーセロッディーン・シャーとその時代

ガージャール朝の第4代国王(1831年生まれ): 在位 1848~96年

- ☆ 北側(対ロシア)・西側(対オスマン)の国境はほぼ画定済み  
東側(対イギリス)も治世初期に画定
- ☆ 洋風文化・文物の導入
  - 1848年 アミーレ・キャビールの近代化政策開始(~52年)
  - 1851年 ダール・アル=フオヌーン(王立理工科学校)設立
  - 1858年 省庁改革: 外務省・内務省・財務省などを設置
  - 1873年 ナーセロッディーン・シャーの第1回ヨーロッパ旅行
- ☆ 外国への利権譲渡
  - 1863年 電線敷設権
  - 1872年 鉄道敷設・鉱山探掘権をロイターへ
  - 1888年 銀行設立権をロイターへ
  - 1890年 タバコ利権をタルボットへ
  - 1891年~ タバコ・ボイコット運動 (→ 1905年 立憲革命)
  - 1896年 ナーセロッディーン・シャー暗殺

☆ 旅行好きの王

ナーセロッディーン・シャーの主要な旅行と自身の手になる紀行文

- ・ ホラーサーン紀行(1866年) (書記官が執筆)
- ・ ギーラーン紀行(1870年)
- ・ アタバート紀行(1870年) \* はじめての国外旅行:オスマン領イラクへ
- ・ 欧州紀行(1873年)
- ・ マーザンダラーン紀行(1875年) (側近が執筆)
- ・ 欧州紀行(1878年)
- ・ ホラーサーン紀行(1883年)
- ・ 欧州紀行(1889年)
- ・ エラーケ・アジャム(1892年)

当時の旅行(旅行記)ブーム

ガージャール朝の高官らによる旅行記史料 = 約 300 点 (19 世紀後半には全体の半数以上)

目的: 巡遊、調査、使節、巡礼・・・

行先: イラン国内各地、ヨーロッパ、イラク、エジプト、メッカ、中央アジア・・・

「旅行記文学の普及」

この賞賛されるべき行いを国王陛下自らが普及された。この新たな時代においては、イランの民の優れた者のうち、旅行者でありながら益ある旅について記さない者はごくわずかしかおらず、皆、この崇高な行為において、陛下の追隨を行い、模倣に励んでいる。[MA: 127]

	FA	Mh	N	Mz	MhA	A	不明	計 (国内)
周遊	12	5	49	16	2	7	13	104 (58)
官命	10	5	73	2	0	1	7	98 (57)
巡礼	4	4	41	15	2	9	6	81 (18)
計	26	14	163	33	4	17	26	283 (133)

\* 「官命旅行記」・・・国王や高官からの命令を受けた官僚による調査報告書 [守川 2001]

諸外国では、イギリス、ロシア、フランス、インドなどが対象

★ 3度のヨーロッパ旅行 = 1873年、1878年、1889年

2. ナーセロッディーン・シャーの第1回欧州旅行

<旅程>

1873年4月 テヘラン出発 ~ 9月帰国

ロシア、ドイツ、ベルギー、イギリス、フランス、スイス、イタリア、オーストリア、イスタンブール歴訪

5月11日 アンザリー港出航 蒸気船・鉄道  
 5月17日 モスクワ着 クレムリン、民族博物館、消防隊、(後宮帰国)  
 5月21日 ペテルブルク着 アレクサンドル2世、閲兵、エルミタージュ  
 5月29日 ドイツへ  
 5月31日 ベルリン着 ヴィルヘルム1世、ビスマルク  
 ポツダム、ケルン、ウイースバーデン、フランクフルト、ハイデルベルク、カールスルーエ、バーデン＝バーデン  
 6月16日 ブリュッセル着 レオポルド2世  
 6月18日 ロンドン着 ヴィクトリア女王(ダイヤモンドの勳章)、グラッドストーン  
 ポーツマス、グリニッジ、リヴァプール、マンチェスター、ロンドン市内  
 7月6日 パリ着 マクマオン、(ナポレオン、ブルボン家の遺品)、ルーブル  
 7月19日 ジュネーブ着  
 7月23日 トリノ着 (7月26日ミラノ) ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世  
 7月28日 ウイーン着 フランツ・ヨーゼフ1世、ウイーン万博  
 インスブルック～ボローニャ～ブリンディジ～エーゲ海  
 8月16日 イスタンブール着 アブデュルアズィーズ1世  
 8月28日 ティフリス(トビリシ)着 ロシアに亡命した伯父 Bahman Mirza と面会  
 ギャンジャ～バクー  
 9月4日 アンザリー港着  
 9月22日 テヘラン着

皇族／各国大使

軍の閲兵／議会／警察

鉄道／蒸気船／軍艦

工場(兵器・大砲・綿織物・ゴブラン織り)／銀行／造幣局／海軍学校／病院

宮殿／庭園／調度品

教会

博物館／美術館／動物園／植物園(温室)／水族館／図書館

バレエ／オペラ／舞踏会／コンサート／劇場／手品／サーカス

<ドイツ>

人々は無礼である。ここでの自由は、ロシアよりもきわめて多い。・・・私が今見ているプロシアの駅は、簡素な部屋で簡素な造りである。ロシアのものの方が千倍もましである。・・・要するに、ロシアの駅停はこことは一切似ていない、ということだ。[p. 76-77]

この境域で様相はすべて変わってしまった。人々、土地、土地の様子、馬車、食べ物、人、すべてが一変した。プロシアの土地の豊かさはロシアに比べて優っている。あらゆるものが目に入る。村、家、人、馬、ガチョウ、ガチョウの雛、豚、子豚、鳥、雌鶏、家の囲い、牛、馬、雌馬、牧草地、農地、色とりどりの花。[p. 77]

ロシア皇帝の宮殿ほどの壮麗さや立派さがない。宮殿も家臣も建物の装飾なども、ロシアのほうがここよりはるかに勝っている。[p. 84]

ドイツでは女性が非常によく働く。とりわけ農作業や庭仕事に非常に精を出す。大半の男たちも働いている。[p. 127]

ヨーロッパの町はどれもみな同じだ。印刷された紙のようだ。1つの町を見ると、他もすべて同じである。子供、年寄り、女、庭園、小路、週刊、店舗、様相[のいずれをとっても]。[p. 113]

ヨーロッパでとてもとても優れていて驚くべき技術は、大理石のように、漆喰を石にしていることである。石とまったく区別がつかない。なんとすばらしい技術か。その名を「スタッコ(Stuque)」という。[p. 123]

#### <ベルギー>

しばらくして、小さな川に至った。小さな橋があった。ドイツとベルギーの境界は、この川であるかのようだ。しかるに、この世界の創造主は、諸部族や諸国をどれほど、またどのように互いにわけ隔てられたのか。まったくもって驚きである。この区域では、人、言葉、信仰、土壌、水、山、大地が一変し、ドイツとはまったく似ていないところがない。山々は高く、木々に溢れ、気候はより涼しく、言葉はすべてフランス語で、人々は貧しく、外面も内面も、軍の状況、軍の服装、人間、一度に変わってしまった。ベルギーの住民はすべてフランス語を話している。個別の言語もある。彼らの宗派は大半がカトリックで、この国の臣民はドイツよりも自由である。君主がいて、名はレオポルド2世という。首都はブリュッセルだ。[p. 126]

[リエージュにて]馬車から降りた。軍が立っていた。楽隊が演奏していた。だが、ベルギー国は、とてもとても貧相な兵士を持っている。いずれも子供のように小さく、貧相な体格で力なく、痩せてよわよわしい。騎兵、砲兵、歩兵を見たが、どれも一様だった。彼らの服も悪い。イランの実に貧相な軍隊でさえも、彼らよりはましだ。[p. 132]

ベルギー王国はとても自由で気ままである。国王は何ら権限がない。諸事の決定は議会にある。代議士たちがそこに集まり、判断する。議会は立派な建物で、[ブリュッセルの]町の中にある。ちょうど開いており、代議士たちが集まっていた。この地方の新聞記者はとても自由だ。思いついたことは何であれ書く。誰をも恐れていない。[p. 134]

#### <イギリス>

偉大な民族だということは明らかである。世界の創造主は、とりわけ彼らに権力と能力と知性と感性と教養を与えたのだ。だからこそ、インドのような国を征服し、新大陸や世界の他の諸都市のどこにでも相当な土地を所有しているのである。[p. 143, 守川 2009]

[ウインザーにて]女王の宮廷執事である Lord Chamberland (sic)が、イギリスの権威ある勲章のひとつである「ガーター勲章(Jartier)」を持ってきた。これは、国王以外の人物には渡さないものである。女王は立ち上がり、自らの手で我々に勲章をつけ、肩帯をかけ、長いガーターもくれた。・・・[ガーター勲章の由来]・・・もらった勲章はダイヤモンドがちりばめられていた。帯や勲章に記されている文章は、「邪な考えを起こす者に、呪いと恥あれ(Honi Soit Qui Mal y Pense)」である。要するに、多くの敬意でもって勲章を受け取った。女王は我々に口づけし、我々もまた彼女に口づけした。着席した。こちらもまた、ダイヤモンドがちりばめられた新たな[デザインの]「太陽勲章」と肩帯を、ダイヤモンドの我が肖像の入った勲章とともに女王に渡した。彼女もまた、この上ない敬意でもって受け取り、自らにつけた。[p. 149-150]

リヴァプールは大きな町であり、イギリスの大きな港かつ商業地である。大半は新大陸と往来している。新大陸からは小麦や綿がたくさん入ってくる。イギリスの小麦は彼らの食糧として十分な量をまかなえていない。イギリスやドイツなどからの多くの移民が、この港から新大陸へ行く。わかっているところでは、年に20万人以上がこの港から新大陸へ行き、誰一人としてヨーロッパの地には二度と戻ってこない。・・・商売と技術の町だ。労働者がとても多い。ロンドンの住人に比べて、ここには貧しい人が多いように見える。彼らの顔から明らかだが、苦勞して日々生計を立てながら暮らしている。[p. 173-174]

## <パリ>

今日[7月6日]はフランス人の中に異様な光景を見た。まず、ドイツとの戦争後の服喪の状況が残っている。若いも若きも総じて悲嘆に暮れ沈んでいる。女性たちの服は喪服であり、ほとんど飾りがなく、実に質素である。というよりも、ひどいものだ。たまに人々の中から「Viu(sic) Makmahon, Vive Marshal, Vive Shah Pers (マクマオン万歳、マーシャル万歳、ペルシアの王万歳)」という声が聞こえる。夜の散歩のときに聞いた別のものは、「王権とその基盤が強固であらんことを。永からんことを」と大声で叫んでいた。何であれ明らかなことは、現在、フランスには多くの派閥があるということだ。大半は王制支持者だが、その中にも3つの派がある。1つはナポレオンの子孫を望んでおり、もう1つはルイ・フィリップ(オルレアン公)の子孫を、また別の一派はブルボン家のヘンリー(アンリ)を求めている。彼もまたルイ・フィリップの息子であり、同じ一族なのだが、別の系統になっている。共和制支持者も強い。だが彼らもまた、一枚岩ではない。ある者は、共和制のおおもとである「赤い(Rouge)」共和制を求め、ある者は中間の共和制を求める。そこには王制があつたり、王がいなかったりだ。別の者たちはそれぞれ別の道を求めている。こういった異なるグループの中では、今や一貫した統治はきわめて困難な作業である。このような事態の結末は、再び多くの血が流れ、国が荒廃する以外には何もなからう。完全な王制であれ、完全な共和制であれ、みな1つの考えにまとまる以外には。その時には、フランス国は最も強い国家となり、誰もが一目置かねばならないだろう。だが、これほどの意見の相違は、どうにかなる可能性はない。日に日に悪化している。これほどの偉大な国が損なわれてしまうのは実に残念だ。[p. 210-211]

ヴェルサイユ宮殿にて、各国の大使と面会：日本一副島？(Naonobou Saneshima) [p. 215]

## <オーストリア>

ウイーン万博見学

自国の文物や商品をもってきた各国に対して、それぞれに区画や場所が与えられている。たとえばフランスは、一列の陳列棚と、その両脇に二列の棚を整え、自国の商品を・・・まさに本場にあるがままに並べている。・・・一方、ロシア、イギリス、ドイツといった一部の大きな国々やオーストリア国は、たくさんの場所とたくさんの品物を展示している。オスマン国やエジプトやギリシアや日本や中国などは、それぞれに十分な程度で、あらゆる種類の品を送ってきている。[p. 299]

## <イタリア>

バレッタからプリンディジ近郊まで、道の両側はすべてオリーブの木が生えている。オリーブ[の木]はとても古く、500年くらいはありそうだ。ヨーロッパのオリーブ油の大半はここからもたらされる。綿花栽培もあった。プリンディジは古い町だ。鉄道が造られてから、少しずつ発展している。現在は港で、イギリスからの郵便や手紙がここを通過してインドへと運ばれる。同様に、インドからイギリスへは、エジプトと紅海を経由する。この地の人々はとても貧しい。・・・かつてテヘランで大使だったアシュラフ・パシャが船で迎えに来ている。・・・イスタンブール(Islambul)に向けて出航する。至高なるアッラーの思し召しがあらんことを。ヨーロッパ[旅行]——神に感謝を——は、良好なうちに、至高なるアッラーの恩寵により無事終わった。願わくば残りの旅行も順調に過ぎんことを。[p. 345]

## <オスマン朝>

大宰相と、「イスラームの両国家の協調(ittihad)」を話題に[p. 331]

スルタンは、太って大柄な男である。腹が出ていて、メランコリー気質で気遣いだ。暑い気候にまったく耐

えられない。・・・オスマンのトルコ語である自分の言葉以外には、他の言語を何ひとつ知らない。いつも顔をしかめており、地理や幾何学と言った学問を何ひとつ享受しない。地理や地形や(緯度)経度はまったく理解しておらず、自分のものであるエルズルムがどの地点にあるのか、どこに位置しているのか、東なのか西なのか知りもしない。自身の2ファルサング[四方のことでさえも]10分の1も知らない。・・・非常に臆病で、一度も狩りに行ったこともなければ、銃を手にしたこともない。こういったよき性格にもかかわらず、現在、国事を宰相たちの手から取り上げ、自ら、それに女たちが介入している。1時間ごとに人々を罷免・任命する。誰も自分の未来が描けない。このような状況である。[p. 349-350]

## < 中国 >

Trentham の Duke of Sutherland の邸宅にて:

イギリスとフランスの戦争の前に、中国で中国人の手に捕らえられていたイギリス人——名前を Coke (sic) という——がいた。私は彼の捕虜生活について尋ねた。彼は説明した。捕虜の間、中国人はたいそう我々を苦しめた、と言った。[p. 176]

## おわりに

★ ナーセロッディーン・シャー時代に導入されたもの

近代諸学・軍服・勲章・電線・鉄道・電灯・写真・舗装道路・博物館・動植物園・・・etc

Nāṣir al-Dīn Shāh, *Rūznāma-yi khāṭirāt-i Nāṣir al-Dīn Shāh dar safar-i avval-i Farangistān*. Ed. F. Qāzīhā. Tehran, 1998.

I'timād al-Salṭāna, Muḥammad Ḥasan Khān. *Al-Ma'āthir al-āthār*. Lithography. [n.p.] [n.d.]

Amanat, A. *Pivot of the Universe: Nasir al-Din Shah Qajar and the Iranian Monarchy, 1831-1896*. University of California Press, 1997.

守川知子(2001)「ガーリャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』55、44-68頁。

守川知子(2009)「イラン国王の欧州旅行(1873年)」『世界史史料 8 帝国主義と各地の抵抗 I 南アジア・中東・アフリカ』(歴史学研究会編、岩波書店)、217-218頁。

